

OOO

PAPER

WORKS AND JOURNALS



Architecture and Design

What's OOO

A group that creates culture through architecture.

When designing, we will propose a straightforward idea suitable for the occasion by observing various environments and cultures surrounding the project in a cross-cutting manner and tracing back to the essential proposition.

We consider that the resulting cultural space will be unconsciously comfortable and universally beautiful.

We strive to understand traditional culture, cultivate the modern culture that is there now, and create future culture.

OOO とは

建築を通して文化をつくる事を目的として設計活動を行うグループです。

設計を行うにあたり、プロジェクトを取り巻く様々な環境や文化を横断的に観察し、本質的な命題まで遡る事で、その場に相応しい素直なアイデアをご提案します。そうしてできあがる文化をまとった

空間は、無意識的に心地よく、普遍的に美しいものになると考えています。

培われてきた伝統文化を理解し、今そこにある現代の文化を耕し、これから先の文化を創出します。

Chiba Takaoka in Yaesu Midtown

Location : Yaesu, Tokyo, Japan
 Function : Restaurant
 Size : 41.08m²
 Structure : Steel
 Completion : 2023
 Construction : AIM CREATE
 Plastering : Tatsuya Tokura
 Lighting design : Katsumasa Asada (GLD)
 Photo : Shota Hiyoshi



東京駅直結の千葉

千葉の名店「鮭たかおか」の移転計画。私たちが千葉市の店舗内装を担当したのが2013年。その後誠実で旨い鮭が評判で、絶大な人気を誇る当店が東京駅の目、八重洲ミッドタウンに移転することとなった。地元千葉に旨い鮭店を構えることがプライドである店主にとって、都内への移転はたかおか、ひいては千葉を広く発信することが主な目的であるため、営業をある期間に限定し、いずれ千葉に戻ることを前提とした計画である。店主からは千葉店と同じ内装環境と、アプローチ空間に都会にはない野生味のある空間が求められた。つけ場背面の漆大壁は千葉店から移設したもので、アプローチの露地空間にはこの店のシャリのお米を栽培している田んぼの土を床壁に連続して塗り、露地天井には殆ど洒落と言っても良い、巨大でユーモラスな落花生型の和紙成形された照明器具を吊るす等、千葉の風景イメージとの接続を試みた。



八重洲ミッドタウン

モール型店舗の世界観～露地と躰り口～

八重洲ミッドタウンの3階には11店舗の飲食店が軒を連ねており、どの店舗も中央の共有通路からアクセスする、いわゆるモール型のテナント店舗である。ある程度グレード感のある共用空間に面しているとはいえ、建物の外形を持たず、区分ごとに線引きされた横並びのモール型店舗で営むことは、唯一無二の固有性を持つこと自体が付加価値となる高級店に向いているとは言い難い。そこで共用部から客席にいたる中間に露地空間を設けることで共用部への意識的接続を切断し、より店舗の世界観を強調することを試みた。露地は照度を落とし、壁と地面を連続させることで視覚への情報量を抑え、土の素材が野性味のある有機的な空間を醸し出すことで、うまい鮭を受け入れるために五感をリセットできるような設えとした。ある種儀式的に露地空間を経て入店しているため、客席から共用部の手洗いにいく際は露地は通らず、簡易的

に気持ちの切り替えができる小さな躰り口を使う。



躰り口

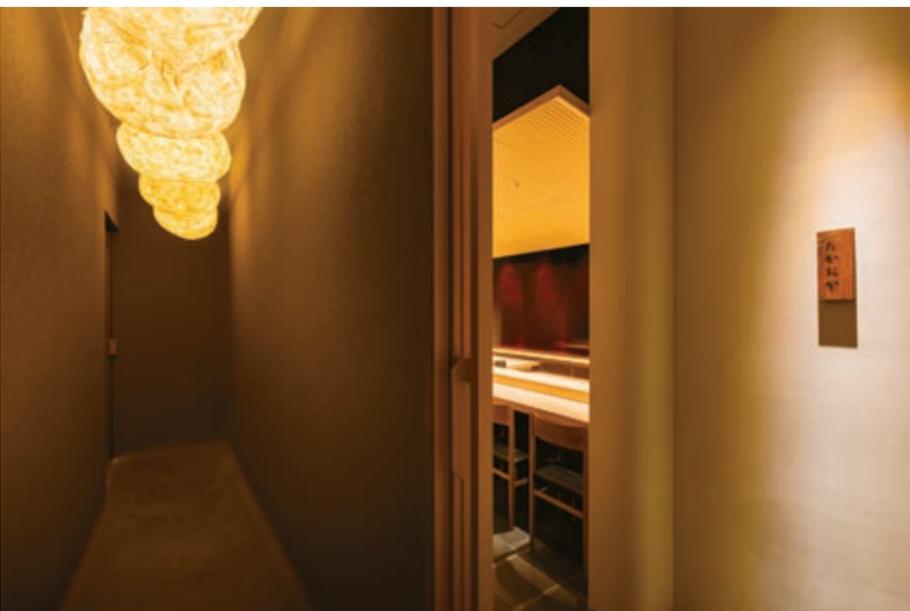
サステイナブルな視点で飲食店をデザインする

2013年千葉店を設計した際に私たちが埋め込んだ仕掛けが10年後に稼働した。短期間のスクラップアンドビルドが前提となるテナント型飲食店の内装は、その時の店を表現できる最低限の仕様となるのがほとんどである。たかおか千葉店では将来的な店舗移転時の二次利用を見据えて、モノとし

てのオーラをまとった上質な漆(輪島塗)をつけ場背面壁を彩る素材として選択した。建材自体に付加価値を与えることで、「捨てられない建材」となり長く利用される、という仕掛けであり、取り外し可能な納まりを施している。八重洲ミッドタウン店には千葉店で深みを増した漆塗り板を移設することで、店独自の文化としてイメージを定着させた。なにより美しくオーセンティックな漆は店内の空気を演出するだけでなく、その伝統的技術の口承により店主と客のコミュニケーションが生まれ、食事という体験の一部となる。店舗デザインにおける建材を店の資産として捉えて設計することで、経営上のみならずマテリアルフローとしてもサステイナブルな好循環を生む。



たかおか千葉店(2013)



壁の奥にある純朴さ - 左官壁・床 -

露地の壁・床の土壁、店舗外観と客席の本漆喰は、左官職人 都倉達弥氏による仕事だ。土壁に使用した土はたかおかのシャリのお米を栽培している千葉の田んぼから採取したものである。素材の特性を読み取り、左官材としての魅力を引き出された土壁は、技巧の妙を見せつけるものではなく、田んぼで感じた空気感を醸し出す、実に純朴な土壁である。建築空間の各エッジは丸みを帯びた丁寧な仕上がりとなっていることで、空間全体に凛としながらも、やわらかく、温かい印象をもたらしている。



SAKAN TOKURA/ 都倉達弥

大分県で修行後、ドイツを拠点に、壁を塗りながらさまざまな国をめぐって活動。幾多の人々と出会い、多様な技術や表現を会得し、左官都倉を設立。2011年よりドイツアーヘン工科大学にて講師を務める。
<https://sakan-tokura.jp/>



日常にないノンスケールのオブジェクト - 吊照明 -



露地には4つの土佐和紙で成形された照明が浮遊している。最も大きなもので700mm×1600mm程度。照明器具としては小さくオーバーなスケールだが、日常で目にすることのないスケールのシェードとすることで露地空間での知覚の位相変化を促す。この巨大でユーモラスな形状のシェードは実寸大に削りだしたスチロールの型に幾重にも和紙を糊付けし、月明かりのような光の透過具合になるよう調整を行っている。あらゆる紙の性質を知り尽くした「かみ屋」さんにより実現した。



かみ屋

かみ（紙）に関する美術品及び文化財に対する様々な事業を展開。紙原料及び紙の製造販売から、紙加工・表具仕立・修理までを一環して取り組む。あらゆる角度から「かみ文化」の普及と発展に貢献している。
<https://www.kamiya-art.com/>

溜色本堅地仕上げ研ぎ止め - 漆大壁 -



客席から望むつけ場背面の壁は輪島塗溜色本堅地仕上げ。奥行のある吸い込まれそうな本漆は官能的ですらあり、広くない店内にも拡がり華を与える。本来鏡面仕上げが基本だが、客人の顔が写り込まないよう、反射しないギリギリのところで研ぎを止める特注仕様としている。

輪島キリモト

石川県輪島にて、江戸時代から200年以上「木と漆」の仕事に携わってきた桐本家。木地業を生業にしながら、木と漆が暮らしに溶け込むようなモノ作りに挑戦し続けている。
<https://kirimoto.net/>

Photo Gen Saito

一期一会 - ヒノキの一枚板 -

客席とつけばのカウンターは樹齢100年以上のヒノキの一枚板。千葉店と同じ丸志木材さんに目利きによるものだ。一枚板は一点もの。材寸法や使用箇所特性、コストが見合う材は多くない。一期一会の出会いである。

丸志木材

静岡県の天竜区に本社・製材工場を置く木材会社。天竜材や国産材の普及に取り組む。手間をかけてでも、皮以外ほとんど無駄がない製材により環境配慮に努めている。
https://www.marushimokuzai.co.jp/about/ab_history



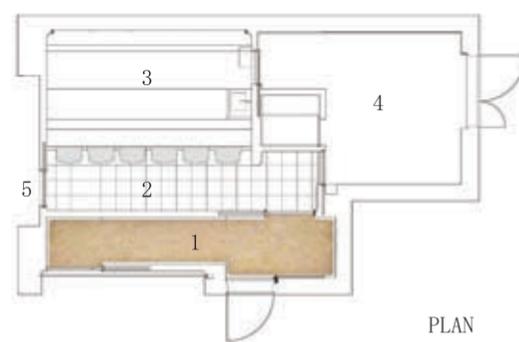
空気をつくる力強い一輪挿し

露地の先には辻村史朗氏の花器を置いた。野性味があり力強いその存在感は田んぼの土壁、和紙照明により活き活きとした生命力を与える。



陶芸家 / 辻村史朗

人里離れた奈良の山奥に住処と窯を自らの手で建てて以来、独自の創作活動に取り組む。海外からも高く評価され、メトロポリタン美術館やボストン美術館をはじめとした数多くの美術館や博物館で作品が所蔵されている。



column

モノづくりにナラティブは必要か

多種多様な情報があふれ、モノ（完成品）が容易にコピーができる時代。モノ自体で差別化を図るのではなく、モノが誕生するナラティブ（物語）に価値を見出すことが求められている。生産者の顔が見える安心な野菜。フェアトレードの宣言とトレーサビリティを明確化したエシカルなダウンジャケット。料金の1%が環境保全基金に自動的に寄付される電力サービス、共感できるナラティブが消費行動の判断基準としての比重を増してきたのは疑う余地がない。一方で生産者がプロセスやナラティブが換金可能であることに気づき、要領を得たことでモノ自体のクオリティ低下を招いている状況も散見され始めたように思う。ナラティブが良ければモノはまあまあでも売れてしまうのである。

良いナラティブは、モノの言いようのない魅力的なオーラ（呪術的な意味ではない）を裏打ちするように開示されるプロセスであるべきであり、モノづくりにおける率直な情熱に付随する物語であるべきだ。プレゼンテーションを意識し、元々関連性の乏しいコンテキストを無理やり紡ぐことで捏造する物語ではない。モノづくりのコンセプトルールとして定めることでクオリティ向上に制限をかけてしまうようなナラティブであればそもそも必要ない。もちろんモノづくりの関係者に共通認識を与えモノを社会実装するためや、モノの新たな視点を与えるためにナラティブは必要だ。しかし何よりもモノ自体をよりよくすることとインタラクティブな関係であるべきだと思う。

House in Koganei

Location : Koganei, Tokyo, Japan
 Function : Housing
 Size : 95m²
 Structure : Timber
 Completion : 2023
 Structure design : Takashi Baba Structural Design Office
 Construction : Watanabe tomi Co., Ltd. (Kazuo Watanabe, Kotone Isomura)
 Furniture making : mute furniture (Nobuhiko Hidaka)
 Photo : Shota Hiyoshi



谷に寄り添う 5つのルーム

都心から 25 分、いわゆる郊外型住宅地に位置付けられるが、その中でも 16 坪という小さな敷地に建つ 3 人家族のための住宅である。郊外型住宅地における狭小敷地は、容積率の影響だけではなく、接道条件や方位により床面積や建物形状の制約を特に受けてしまうことが多いが、この敷地は北側の二項道路（幅員 3.8m）と東側の都市計画道路（幅員 16m）に面することから、北側・道路斜線制限の影響が比較的少なく、敷地面積が小さい割には垂直方向へまともな容積を確保できる敷地であった。また、狭い敷地であるものの、街との距離感を確保し自立した生活環境で暮らしたいという

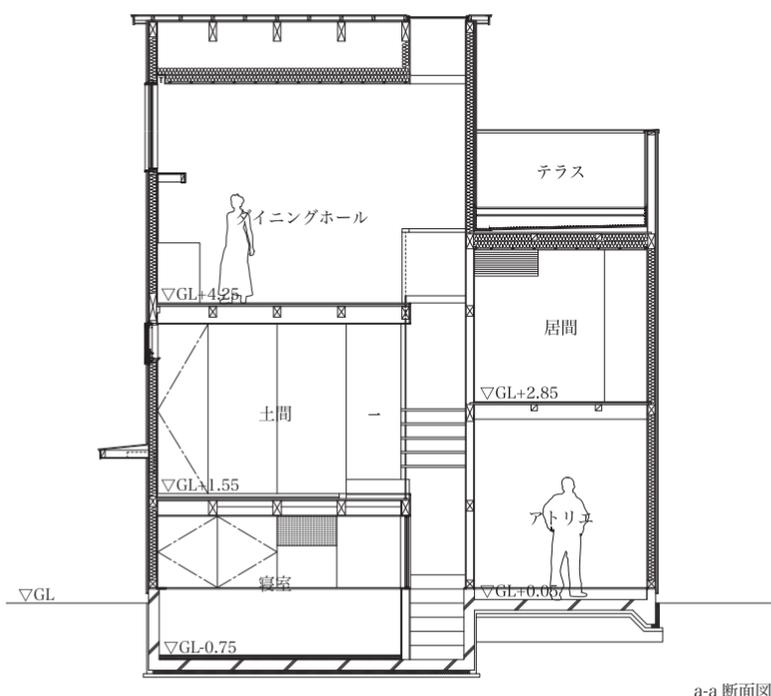
住まい手の要望もあることから、この敷地のもつポテンシャルを生かし、垂直方向のボリューム操作によって狭い敷地の中でも広がりや囲われ感を共存させる空間をつくれなかと考えた。そのため、敷地の北側に 2 層ボリューム、南側には半地下を有する 3 層ボリュームを配置し、スキップ状にズレた床の谷間に浮遊感のある階段を架ける構成とした。一般的な床レベルから開放することで、開口部計画等においても街との距離感がコントロールしやすく、1 層 = 1 室の関係としたため、階高（天井高）設定を室の性質に依存させ、室が求める適切なスケールへの微調整が可能となった。各部屋に固有の床レベルと天井高さを持たせることで私の領域を自立させている。

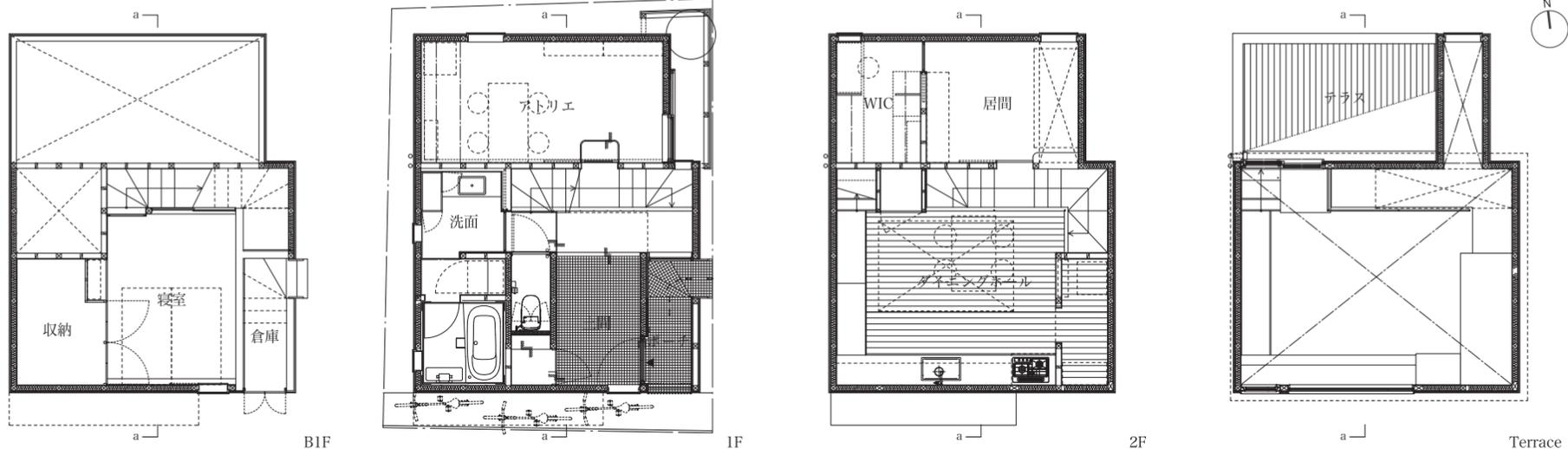


谷を介した奥行きが、狭小敷地に広がりをつくる

東側の通りに面して設けられた小さな隙間からポーチに入り、1.5m 昇った位置にこの家の玄関はある。十分なアプローチ空間を確保することが難しい敷地であるが、小さなポーチに昇るという行為を加えることで、街とのバッファーとしての役割を補強している。小さなポーチを潜り抜け、建物の断面的な中央である玄関を入ると、半階ずれた上下の 2 室が同時に見え、上部はトップライトや空の窓からの光、下部は地下への静けさを同時に感じられ、そのグラデーションによる上下方向への奥行きが体験としての広がりを生んでいる。また、玄関を起点に上部 2 層に居間とダイニング、下部 2 層にアトリエと寝室を配置し、住空間内に公私のヒエラルキーをつかった。全

室が面する谷間の階段スペースに対して各室異なる固有の開口部を設けた。寝室は障子、アトリエはモールガラス框戸、居間は大きな腰窓、というように各室の機能に応じた開口部により隣接する室と適度に接続し、家族のふるまいが繋がらう。





10年後の街の風景に馴染む佇まい

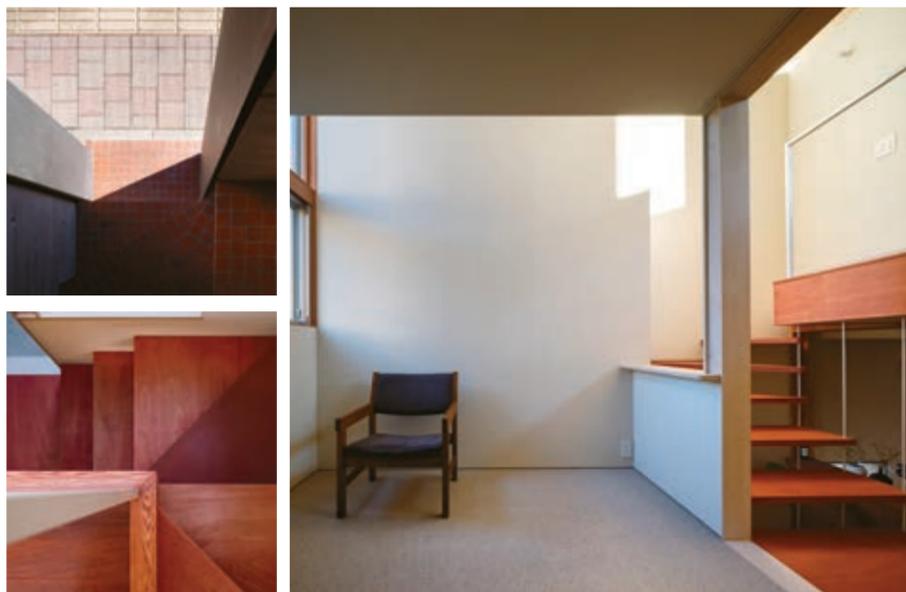
狭小敷地であることから物理的に通りとの距離は近く、ややもすれば生活感が滲み出やすいのだが、郊外でファミリー層が多く保守的な雰囲気が漂うこの界隈では、建築を開き生活感を積極的に表出させて街並みへ参加する風景は似合わない。実際街を歩いても、周辺住宅の窓のほとんどは常にカーテンやシャッターが閉まっており、生活の現象としても街の性質を物語っている。さらに、数年後に前面道路を約300m南下した位置に市役所新庁舎の建設が決定している。前面道路が役所通りになると当然交通事情は大きく変わり、往来者の増加やその属性も多様に変化することが想像できるため、街との距離感を纏わせた建築にしたいと考えた。そのため東側にはあえて

閉じて私的空間を守り、要素を絞った静かな外観とした。外壁はほのかに赤みのある左官壁で設え、分節したボリュームや軒、建具枠が左官壁に落とす陰影で表情が変化する外観とした。街が許容できる建築の佇まいと未来の風景を意識した外観デザインとした。



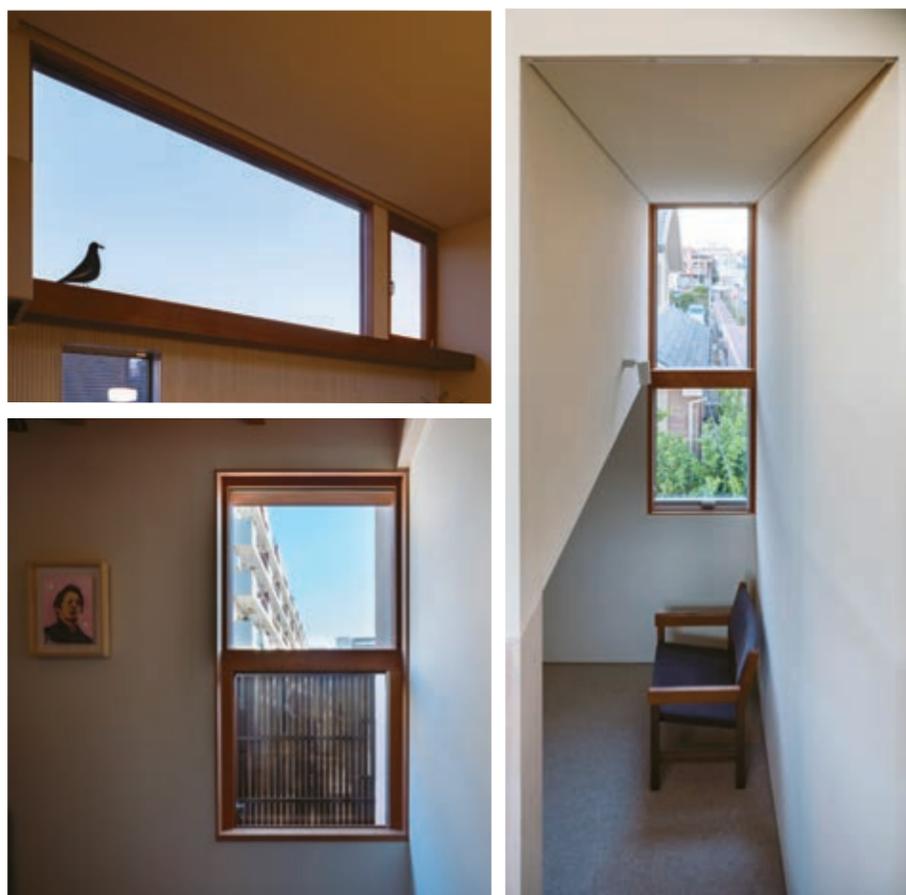
赤い床

外部から連続するこの家の共用空間を赤い床で設えた。アプローチ・土間の無釉せっ器質タイル、階段の染色ラワン合板、そしてダイニングホールの南洋材メルバウ無垢フローリングといった赤みをもつ異素材を敷き並べた。きっかけはこの街共通で歩道舗装に持ち入れられる赤褐色インターロッキングブロックである。街の要素をこの家の共用空間の共通言語として持ち込むことで共用空間を外部のように見立てられ、共用空間と室が明快に切り替わるこの家の構成をさらに強調できると考えた。プライベートな室とのコントラストは強まるため、完全に閉じた室としなくても自立した領域性が生まれると考えた。



3つの大窓（空、大地、街）

決して広くない住宅の中でも、物理的広さを越える拡がり感を獲得するため、意識を外部に拡張させる3つの大窓をつくった。空の窓は、最上層のダイニングに設けたW2.5m×H1.2mの空に開いたピクチャレスクな大窓。日々変わる天候や雲の形、太陽や月の動きといった自然のダイナミズムを大きな額縁で切り取り、小さな住宅空間に贅沢な潤いを与えている。大地の窓は前面道路に平行して視線が抜けるように設け、伸びやかに広がる武蔵野台地の地形を無意識的に日常に採り込んでいる。地勢との意識の接続により、この街に住まう安心感や帰属感が育まれると考えている。街の窓は、対面する集合住宅と集合住宅の間の隙間を狙って設けた段窓である。下段窓は板塀のパーラインによるモンタージュ的視覚により、行き交う歩行人を適度な距離感で断続的に捉え、上段窓からは安定して開放的な視線の抜けを得られる。アトリエでの作業中、ふとした瞬間に意識を外に飛ばして、もの思いにふけられる窓になることを期待している。



column

作り手と使い手と語り部

最近、吉祥寺の中道通りに面する小さなセレクトショップ「toulouse」へしばしばお邪魔する。目立たない入口を入ると、洋服で満たされた静かな店内の中、小柄なおじさん店主が「いらっしやい」と控えめに出迎えてくれる。陳列にも意図を感じられる洋服にそっと手を伸ばすと、おもむろに店主は語り出し、洋服の説明はもちろん、その洋服のデザイナーのあれこれを教えてくれる。その話の節々にはデザイナーへの理解やリスペクト、距離感の近さを感じ、デザインに携わる者として店主のそのスタンスが嬉しい。そして全ての洋服に一度袖を通していただろうかと思うくらい、着心地の説明が的確だ。試着室から出ると、「この服も好きだと思うよ」と、別の洋服も勧められ、Amazonのレコメンド機能以上の的確さに買い過ぎてしまうこともしばしば。もはやアノニマスブランドにも感じる昨今の大衆的セレクトショップとは一線を画し、店主がセレクトした背景が見え、洋服の出自から着心地まで全てを理解しているからこの店は面白く、購入した洋服への愛着は深くなるのである。

作り手のブランド感と使い手が感じるニュアンスの差異、つまり感覚の隙間を語り部である店主が埋めているように思う。或いは語り部が使い手を作り手のブランド感に引き寄せ、ただ使うだけではない優越感を生んでいるのだ。建築に置き換えると、作り手と語り部は建築家が担うことになるだろう。建築空間は様々な素材の総体であるが、その出自を理解し、使い方や工法まで様々な選択肢の中から建築家が選択をする過程がある。語り部という意識で動いている訳でもないのだが、私たちはその過程でクライアントとよく話し、様々な情報を共有することが多い方だと思う。双方向的に作り手と使い手のニュアンスが重なり始め、空間が身体の一部のように身近に感じることがある。そんなことから空間への愛着が育まれると嬉しく思う。

House in Heiwadai

Location : Nerima, Tokyo, Japan
 Function : Housing
 Size : 47.20m² (only renovation part)
 Structure : Timber
 Completion : 2023
 Construction : Watanabetomi Co., Ltd. (Kazuo Watanabe, Kotone Isomura)
 Furniture making : mute furniture (Nobuhiko Hidaka)
 Photo : Shota Hiyoshi



2階のみのリノベーション

2階建て戸建住宅の改修計画。夫妻と子1人のための空間を設計した。夫はカメラマンを職業としていてヴィンテージ家具やレコードなどに造詣が深い。現在もこの住宅には祖母が一人で住んでおり1階を使用しているため、2階のみをリノベーションをする方針であった。また、構造はツーバイフォーで壁や梁を撤去することは基本的にできないため、間取りの変更に制限が多い改修となった。

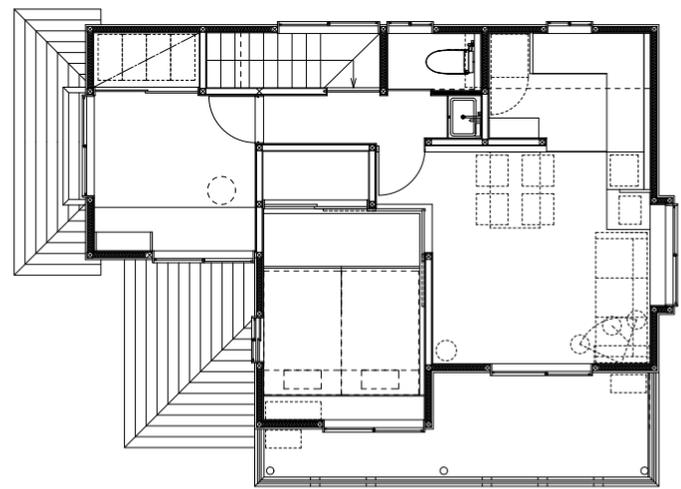
とはいえ、決して広いとは言えない面積の2階に家族3人が気持ち良く暮らすための場となるよう空間のチューニングを行った。まず、既存の梁を受け入れ、敢えてオブジェクトとして存在感のある黒に着色した。この梁に対して白の勾配天井を形成した。これによりリビング空間にキャラクターが生まれ2階の空間に中心をつくることのできた。次に、寝室とリビングをまたぐように2辺開放の引き戸を設置し開閉によって空間のバリエーションを持たせることができた。以上により、家族が暮らす空間の骨格を整えた。



リビングの天井見上げ

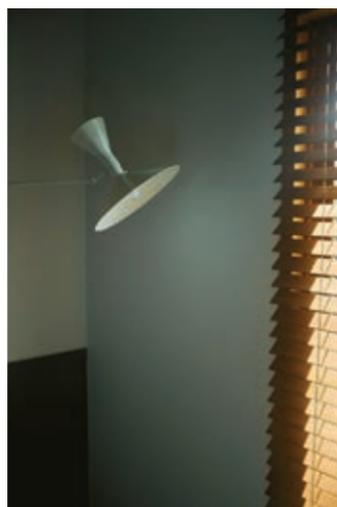
窓回りの光の在りよう

施主はおおらかに設計を任せてくれたが、空間の明るさ感や照明器具のデザインにはこだわりがあった。光を在りよう扱うカメラマンという職業が起因しているのだろう。そのため、内装は空間に光が浮かび上がるよう素材感を残しつつもモノトーンとした。そして、すべての窓回りに異なる表情の光を持った建具やブラインドなどを設えた。例えばリビングの東の出窓にはルーバー格子戸を追加し、朝日に輝くりズミカルな光を、キッチンの窓にはアルミ板と障子を組み合わせ清潔な北側の光を配置するといった具合に。これにより2階の部屋は、ハウスメーカー然とした外観からは想像できない美しい光が散りばめられた空間となっている。



2F PLAN S=1/120

The gallery of photos taken by Keisuke Takahashi (the client of this house)



© Keisuke Takahashi

COCOLON

Location : Shinozaki, Tokyo, Japan
 Function : Welfare
 Size : 126m²
 Structure : Timber
 Completion : 2023
 Structure design : -
 Construction : Fujiken Co. (Kenichi Saito)
 Furniture design / making : mute furniture (Nobuhiko Hidaka)
 Photo : Shota Hiyoshi



「心の根、心の音」

この施設は特定非営利活動法人 EPO が運営する重症心身障がい児・放課後等デイサービスを行う「ここね」に隣接した部屋で、通常活動の利用に加えてイベントやセミナー等、外部発信のために利用する多目的室の計画である。ここでは屋内にいても外にいるような気持ちのよい空間を要望された。また、この施設を利用する子どもたちはほとんどが車いすで生活し、フラットな床は必須の要件であった。

わたしたちはある程度デザイン上の自由度が担保されている腰から上の空間に注目して、外にいるような気持ちになれる空間をデザインすることを意識した。

最も特徴的なのは天井まで折り返されて立ち上がる曲面壁である。森の木々に囲まれるように室の半分を包み込むことで、室内にさらに内側の空間を備えることができるため、窓側が相対的に屋外のような空間となる。窓側は天井高を 350mm 程高くし陽射しを取り込み、床はフローリングとし、デッキのようなあたたかいひなたを作ることによって屋外感を強調した。中央にはこのふたつの空間にまたがる高さ 1260mm のキッチンカウンターがまたがり、多様な場が生まれている。

自然の中で体が環境の微細な変化を感じるように、この活動のテーマでもある「心の根、心の音」を利用者の方々が少しでも感じることができ、ゆっくりと親しみを覚えていけるよう願っている。



5色のグラデーション壁

北側の天井まで回り込む壁の塗装はシナ合板を下地として、5色で塗り分けられている。下部は土に座り込んでいるようにしてイエローに、そこから淡いグリーン、ブルー、グリーン、さらに深いグリーンへと天井に近づくに連れて深い色へと変化させていった。検討には非常に多くの塗装サンプルを作り、現場でも色味の確認を何度も確認しながら、丁寧にこのグラデーションを決定した。また、この壁面の色に対してその他の壁や天井、建具、家具等の色味も注意深く検討し、目に入ってくる形と色、またその面積や目地のバランスを整えていくように念入りに検討した。



デザインにおけるドロ잉

内装デザインのコンセプトイメージの共有にはコンセプトドロ잉や民族画を利用した。建築設計や内装をデザインする際は、常に感覚を言語化するように努めている。言語化することで曖昧さや既成概念を排除し、本質的によいものにたどり着くことができること、また関係者ごとの属性や経験値のムラに左右されない捉え方を共有できること、が主な理由だ。一方で言語化するという事は様々な事象が連続するひとつながりの世界をある断片で切り取り必要以上に分析することと同義でもある。言

語は人が世界を正確に記述するための偉大な発明であるが、画などのアートもまた世界を連続性を保ったまま記述することができる発明である。必要に応じてどちらからもアプローチすればよい。



コンセプトドロ잉 ゴンドアート

光を受け止める木リブ

北側の壁に対して東西の壁は言わば脇役として捉えながら、主張しすぎないよう建具や家具との調停をするように、端部を R 加工した木のリブ材を小さな隙間を開けて取り付けた。頭の上には枝葉の空間が広がる反面、水平には木々が林立し光を受け止め、また受け流していく。この木リブも一定のリズムで光を受け止めながら時間によって表情を変えていく。



微かにベージュに塗られた木リブ

column

かさねの色目

今回の計画では「色」は大きな要素としてありました。私事ですが、NT ラシヤという紙がとても好きで仕方がありません。この紙は 100 色以上の種類があり、グレー 20 で赤みが、グレー 50 あたりに青みが最大化されることが特徴で、ひとつのグレーという色の中にもこれだけの広がりを持つこの紙が私はとても気に入っています。かさねの色目は十二単衣にも使われた言葉でした。布、木、紙。異なる下地のテクスチャとカタチ。それぞれに配される色のかさなりがもたらす豊かさは、まだまだ限らないものであるように思えます。



NT ラシヤ、グレー 8 種

Detail by OOO



MAKE CULTURE

MAKE CULTURE

文化とは原始から現在まで人類が積み上げてきた人間の豊かさの蓄積であると私たちは考えています。そして、これから生み出す私たちの建築もその文化を積み上げるものでありたいと考えています。私たちはこのような建築を設計するために、建築という分野にクローズドにならず、建築を建てるという目的に関連する、衣食住、芸術、音楽、映画、ファッションなど様々な分野のプロフェッショナルと、必要に応じてアメンバーのようにチームを成しながら、建築を設計していきたいと考えています。そして、このようなスタンスで生み出される建築は人々の営み総体としての文化を纏ったものになると考えています。OOO は「Make Culture」というビジョンを実現するために「Dive・Play・Make」の3つのスタンスを基に活動を行います。

DIVE

いいかい、怖かったら怖いほど、逆にそこに飛び込むんだ。

やってごらん。

岡本太郎

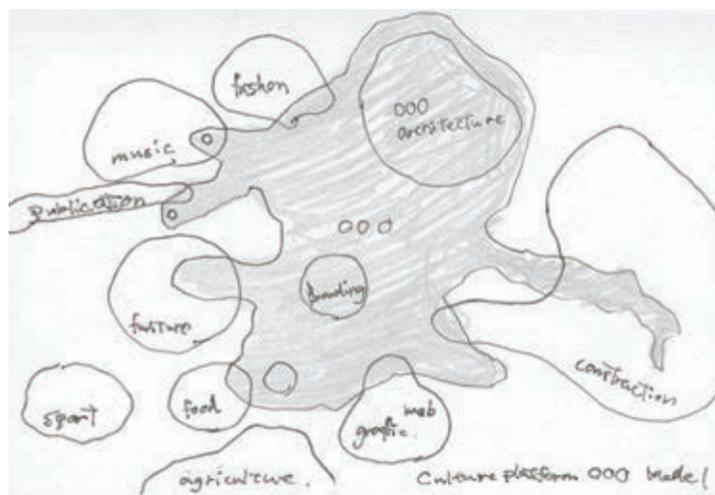
昨今、私たちを取り巻く価値観は急速に変化しています。建築・デザインの分野はもちろんのこと、デジタル技術、環境問題、SDGs、LGBTQ+等、ダイナミックに変化する新しい価値観に対し貪欲に興味をもち、SNS や画像検索だけで得た知識だけでなく自分たちの体と頭で理解を深めます。また、これまで建築が建築として扱ってこなかった分野や業務にも積極的に身を投げ出し、フィジカルにその価値感を体感します。

PLAY

「Dive」した環境には、必ず解決すべき課題や調整事が存在します。私たちはそういったすべての物事に対し誠意をもって向き合います。そして、そのような物事全てを与条件として受け入れ、同じテーブルに並べ、フェアな目線で眺め、手を動かして設計を進めます。また、クライアントはもちろんのこと各分野のプロフェッショナルと協働し、議論しながら設計を進めていきます。このような態度で検討を重ねることができると考えています。そして何より、このようなスタンスで設計を行うことで、私たちだけでは行き着くことのできない発想に到達できることに私たち自身も建築的な好奇心を持っています。

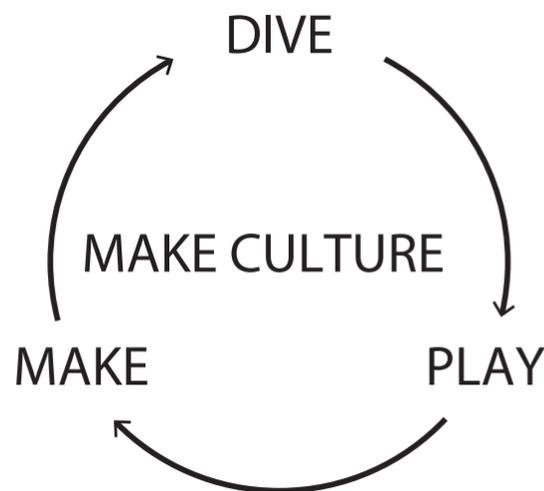
MAKE

「Dive」と「Play」によって生まれた文化の種を図面や模型に練り込みながらその建築を実現していきます。建築は一人の手で完成することは決してありません。施工者の方々ともコミュニケーションを図り、細部にいたるまで血の通った建築を都市に生み出します。このようなプロセスにより生まれる建築は、本質的な意味で文化を纏ったものになると考えています。この新しい文化を醸造する「Make」によって生まれた人と人、物と物、あるいは人と物のつながりは、あらたな世界への「Dive」へのきっかけとなります。OOO は「Dive・Play・Make」の循環によって「Make Culture」を実践していきます。



OOO デザインプラットフォーム

アメンバーのように流動的に変化するデザインプラットフォームのイメージ。プロジェクトベース、あるいは哲学や思想などの観念でのつながりもあり得るのかもしれない。人と人のつながり方が劇的に変化した現代において可能な、新しいチームの成り立ちをめざす。



Make Culture の循環モデル

Dive・Play・Make を運動のきっかけとした Make Culture の循環モデル。文化を造るという大きなビジョンを実践していくには常に動的であることが重要であると考えている。変化を受け入れ、スパイラルアップしながら運動を継続させていくことが必要である。

Profile



佐藤 陽 Yo Sato

1985 福岡県生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了
2011-2021 株式会社佐藤総合計画
2015- OOOarchitecture 共同主宰



馬場 亮平 Ryohei Baba

1985 長野県生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 スイス・メンドリジオ建築アカデミー奨学生
2012 千葉大学大学院工学研究科 修了
2013-2022 鹿島建設株式会社
2015- OOOarchitecture 共同主宰



和田 彦丸 Hikomaru Wada

1986 大阪府生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了
2011-2023 鹿島建設株式会社
2015- OOOarchitecture 共同主宰

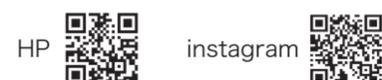


OOO architecture
(オー アーキテクチャ)

2015 年設立。「Make Culture」をビジョンに掲げ、建築をベースに幅広い文化の構築を目指す。

Award
2018 千葉市建築文化賞 優秀賞
2019 日本空間デザイン賞

tel : +81-3-6906-9720
mail : ooo.architecturejp@gmail.com
HP : https://oooarchitecture.com/





on going...

千葉の発達支援センター

Location : Chiba, Japan
Function : Child development support center
Structure : Timber
Completion: 2024

直方の納骨堂

Location : Nougata, Japan
Function : Ossuary
Structure : Timber
Completion: 2023

直方の保育園

Location : Nougata, Japan
Function : Kindergarten
Structure : Timber
Completion: 2024

植木保育園

Location : Nougata, Japan
Function : Kindergarten
Structure : Timber
Completion: 2024

八王子の障害者施設

Location : Tokyo, Japan
function : Support facility for the handicapped
Structure : RC
Completion: 2025

市川の住宅

Location : Chiba, Japan
Function : Housing
Structure : Timber
Completion: 2024

and more

